

令和5年度 岡山県立林野高等学校 具体的な学校経営目標・計画 (案)

重点目標	関係分掌	課題	方策(具体的取組)	評価基準(評価可能数値)	中間評価	中期進捗状況	評価	年度末達成状況	新年度への課題
1 日本ICT教育 トッランナー校として、さまざまな場面でICTを活用し、主体的・対話的で深い学びを実現する。	教務課	○さまざまな場面で生徒の自己実現のためにICTを活用し、主体的・対話的で深い学びを実現する。 ○観点別評価の正当な運用 ○新教育課程の運用(改訂)	○授業改善研修会(年2回)、授業公開週間(年2回)の実施。教科を越えた授業の相互参観を促す。 ○観点別評価を教科の指導の工夫につなげる。 ○社会の変化に対応できる生徒を育成するため新教育課程の選択科目を変更し、3年次への科目選択を滞りなく実施する。 ○ICTの活用や観点別評価の運用を共有するために、教科会議を促す。	○授業公開週間で、全員の相互授業参観が3回以上になる。その内、1回以上、他教科の授業を参観する。 ○生徒と教員アンケートで、教科・MDPの資質能力の育成に関する項目や評価に関する項目の肯定率が80%以上になる。 ○教育課程の変更を科目選択の時期に間に合うよう会議を開き、決定する。 ○2年次、3年次への科目選択を10月下旬には完了する。ㄇ切以降変更希望が出ないように説明、面談を丁寧にする。	B	○3年次に情報探究を組み込むことが出来た。 ○1年次生、2年次生にスライド等を使い、説明をする予定。基本的な事例を示しながら選択させたい。	A	○授業評価アンケートではどの教科も肯定的に評価されている。特に身に付けたい力の意識や知識技能の修得について、肯定的な回答が80%を超えている教科は全体の95%以上であった。先生方の授業への工夫が生徒にも伝わっている。 ○生徒のニーズに応えられるように教育課程を一部見直すことが出来た。 ○担任や教科担当の丁寧な面談によって、科目選択が滞りなくできた。	○他の教科の授業見学だけでなく自分の教科を他の学校へ見に行くのはとても参考になる。
	進路指導課	○ICTを活用してキャリアパスポートや活動報告書などに活動の成果を蓄積すると同時に、生徒自身が質の高い振り返りを行えるように指導する。 ○日常の授業のなかで主体的に取り組んだことや探究的に学んだことを記録し蓄積する。	○キャリアパスポートや活動報告書を3年間を通じて使用できるようにすると同時に、振り返りの時間を確保する。 ○日常的な記録も残せるようにし、日々の振り返りを促す。 ○学習実態調査を年5回行うと同時にその結果を早く生徒にフィードバックすることで学習時間の確保を促す。 ○模試の事前事後指導を丁寧に行う。	○キャリアパスポートや活動報告書の記載内容が充実している(教員アンケートで80%以上) ○進研模試において各教科のGTZでB以上の生徒が30名以上 ○国公立大学合格者数15名以上	B	○活動報告書の入力時間を1学期終業式の日と夏期補習中に確保できた。内容の充実、日々の記録が課題。 ○7月記述B以上:1年国35数34英25・2年国55数26英27・(3年国24数24英10地歴20理20)。模試前後の取り組みを充実させる。 ○3年国公立希望者28名。総・推25挑戦予定。 ○1学期に学習実態調査を2回実施。意義の共有、フィードバックはできているが、学習時間は伸び悩んでいる。	B	○活動報告書の入力時間を各学期末と夏期補習中に確保できた。学校自己評価アンケート(教員)「学校は、MDP(総合的な探究の時間)などの活動により、生徒の「生きる力」や「進路を実現する力」を育てている」肯定率74.3%、「学校は、生徒自ら学び、行動する力を育てている」肯定率82.8%。 ○11月記述B以上:1年国37数29英38、2年国53数26英33地歴39理25、(3年国29数17英17地歴16理17)。※2,3年理は文系基礎科目の平均+理化と物生の平均、3年数はI AとII Bの平均 ○国公立大学合格者7名。(2024.1.10現在)	○学びの見直しをもたせる工夫。 ○模試前後の取り組みの体系化。 ○学習実態調査の結果を踏まえ、学習時間を増加させる課題の出し方(方法、内容)を検討する。
	3年次	○進路実現に向けた諸活動においてICT機器を効果的に使用する。	○書類作成や面談の記録などで情報の管理・共有に Google Workspace を利活用する。	○生徒および指導する教員全員が実践している。	B	○生徒のChromebookの利用が3年目になり、活動報告書や志望理由書の作成などに活用できている。	B	○進路指導においても面接や志望理由書においてもChromebookの活用ができています。教員も同様に活用しながら、進路実現に向けた活用を行った。	○活用への生徒の意識も向上しており、活用方法をまとめ次年度の生徒に周知して、効果的に活用する。
	2年次	○生徒の資質能力の育成を第一とし、ICT機器の効果的な活用を探究する。	○デジタルベースと紙ベースを改めて見直し、ICTのより効果的な活用を探究することができる。	○生徒および指導する教員全員が実践している。	B	○面談記録のような推移が見取りたいものはデジタルで、学習実態のような頻繁に教員のチェックを入れたものは紙で実施している。	B	○媒体の使い分けを意識して取り組むことができた。教員の認識も同様に共通認識を図ることができた。	○場面場面に応じた活用方法や効果検証を進めていく。
	1年次	○ICT機器の活用により学習者中心の授業展開を実現する。	○Chromebookを活用した、ペア・グループによる学び合いや考えをまとめたり表現したりする活動。	○授業評価アンケートの肯定的回答が80%以上。	B	○どの教科でもICTの活用やペア・グループワークが積極的に進められている。	B	○年度末アンケートについて、ほとんどの科目で肯定的な回答が80%を超えている。○DX化に向けた授業実践に概ね挑戦できた。	○定期考査や校外模試などと関連させながらの活用や工夫が必要。
	ICT活用PT	○ICTの活用状況に、教科間、教員間で差が見られる。 ○主体的・対話的で深い学びの実現に向けて効果的にICTを活用する。	○年2回の公開授業週間では全教員がICTを活用した授業を実施する。 ○ICT活用に関する研修会を月1回実施する。	○公開授業週間:端末を活用した授業の実施率100% ○研修:月1回実施	B	○公開授業週間:ほぼすべての授業で使用53.8%、多くの授業で使用11.5%、一部の授業で使用19.2%、期間中1度は使用7.7%、使用なし3.8% ○使用率、活用方法に差が見られる。生徒にどう活用させるかが課題。 ○研修:月1回以上実施できた。(4月2回、5月2回、6月1回、7月2回、8月1回)	A	○公開授業週間:第2回ほぼすべての授業で使用37.0%、多くの授業で使用33.3%、一部の授業で使用22.2%、期間中1度は使用3.7%、使用なし3.7% ○2回の授業公開週間で、ほぼ全教員が端末を活用した授業を少なくとも1回は実施した。 ○研修:月1回以上実施できた。(4月、5月、7月は2回)	○端末活用の質を上げる=授業改善に継続的に取り組む。
2 資質・能力の育成を基盤とした授業改善を進め、個別最適な指導を行う。	3年次	○グローバルな視点に立った知識や技能の習得・活用、思考力・判断力・表現力を育む活動を展開する。	○自分の考えをまとめたり表現したりする活動や学び合いを通じて、主体的に学びに向かい、学び続ける力を育成する。	○授業評価アンケートの肯定的回答が80%以上。	B	○アンケートの結果はおおむね肯定的である。	B	○アンケートの結果はおおむね肯定的である。	○授業改善を更に充実させる。
	2年次	○学年団で基礎学力を引き上げる手立てを構築する。	○生徒間で学習時間確保チームを結成し、学習実態調査等の記入・分析をさせ、学習時間を伸ばさせていく意識を持たせる。	○授業評価アンケートの肯定的回答が80%以上である。	B	○前期は学習時間確保チームをあえて結成せずに実態調査に取り組んだ。後期と比較を取り組みの効果を検証したい。 ○アンケートの結果はおおむね肯定的である。	B	○アンケートの結果はおおむね肯定的である。	○一層の学習時間の確保が必要。
	1年次	○学年団で基礎学力を引き上げる手立てを構築する。	○意識付け(放課後教室や手帳の活用)の仕掛けを計画し、学び合いや考えをまとめたり表現したりする場面を増やす。 ○予習復習の徹底により家庭学習時間を充実させる。 ○学年での重点項目を定期的に定め、各教科が連携して小テストの実施や課題など調整する。	○授業評価アンケートの肯定的回答が80%以上である。	B	○外部模試の結果を踏まえ、学年全体で英語に重点をおき、小テストや夏期補習などをおこなった。 ○3教科中心の週末課題を課したり、進路通信で家庭学習の必要性の呼びかけも行っているが、例年と比べ学習時間は不十分である。	B	○年度末アンケートについて、ほとんどの科目で肯定的な回答が80%を超えている。 ○小テストや模試対策の補習や教科別面談などを実施し、基礎学力の底上げを図った。	○授業満足度に対して、自主学習への意欲が低い。個別指導の充実や家庭学習の改善が必要。
	授業改善・キャリアアップPT	○教員の授業研鑽につながる場を設定する。	○教員間で授業研鑽をはかるための機会として、互いの授業参観の機会を設定し、授業評価アンケートの実施し、結果を教科会議等で活用してもらう。	○8割の教員が授業見学を、3回以上行う(評価A)2回行う(評価B)1回以下である(評価C)	B	○6月の授業公開週間で、26名の教員のうち、70%の教員が2回以上授業見学を実施した。	B	○11月の授業公開週間で、26名の教員のうち、89.3%の教員が授業見学を実施した。3回以上は53.6%。	○各教科での授業研究会を同時期に行うことで参加者の増加につながった。次年度の検討材料とした。
3 生徒自身が主体的・計画的に取り組む活動を展開する。	生徒課	○生徒が主体的・計画的に学校生活を送ることができる場を作る。	○各委員会、生徒会執行部から学校内に向けた企画や啓発を行う。 ○ボランティアとともに、委員会等の活動記録が残るようフォーマットを整える。	○各委員会、生徒会執行部単位で校内に向けた活動を1回以上行うことができた団体が、8団体を越える(評価A)6団体を越える(評価B)5団体以下である(評価C) ※全12団体	B	○保健委員は「保健だより」や「昼食企画」など充実した活動ができた。文化委員による「あがりん祭全校製作」は今年度新たに実施した。今後は風紀委員による「鍵閉め啓発」など計画中である。 ○ボランティアの活動記録をフォームで回収し、データ化し、クラウド保存することができた。	A	○今年度実施した活動は以下のとおりである。中央委員 健康観察入力促進運動 保健委員 保健だより、昼食紹介企画、感染症拡大防止ポスター 図書委員 読書習慣促進文化祭企画 風紀委員 自転車原付鍵締めポスター 体育委員 球技大会活性化ポスター 文化委員 SNSとりまとめ広報ポスター 生徒会執行部 あいさつ運動、学校生活改善アンケート 日々の委員会の業務以外に上記活動を行うことができた。計7団体であった。	○来年度は美化委員で校内美化のための調査を計画している。企画や啓発活動を行うことで生徒の意識が変容していくには、頻度を上げ、内容を充実させていく必要がある。
	進路指導課	○進路実現に向けて主体的に情報を収集し分析する力および計画を立てて行動する力を育成する。 ○大学や企業等の訪問、対外的な発表、コンテスト応募など、校外での活動を通して経験を積む。	○ふりかえり方向上手帳などを利用して自己管理能力の向上を促す。 ○各学期に1度以上の面談を行い、生徒の進路意識の向上を促し、進路研究の重要性を伝える。 ○進路ニュースやサイトの運用を変え、情報発信性やメッセージ性を高める。	○進路決定満足度調査において満足・やや満足90%以上 ○教員アンケートで肯定率80%以上	B	○1、2年次生で手帳を導入。活用状況にばらつきがある。呼びかけの工夫が必要。3年次生はスプレッドシートを活用してスケジュールの管理・共有をしている。 ○どのクラスも面談を2回以上は実施。状況把握と適切な声掛けができています。 ○メッセージ性のある進路ニュースに変えた。課題の集約は生徒に任せていってもよい。サイトの運用は課題あり。	B	○進路決定満足度調査は2月20日に実施予定。	○LHR計画、小論文指導、志望理由書指導、面談内容等の体系化。 ○諸活動に主体的に関わらせる工夫、振り返りの方法と内容の検討。
4 生徒自身が社会との関わりの中で、自らの生き方を考え進路を実現することができるように指導する。	3年次	○生徒が自身の将来の姿について考え、進路決定への見直しを立て、具体的な取組を主体的に進めることができるようサポートする。	○面談や相談体制を充実させるとともに、教員間の情報共有を密に行い、生徒が教員の助言を判断材料の一つとして素直に受け入れられる関係を構築する。	○国公立大学合格者数15名以上。 ○進路決定満足度調査において満足・やや満足90%以上	B	○担任面談を中心として、進路指導課により計画的に進められている。 ○3年国公立希望者28名、総推25名挑戦予定	B	○進路指導課を中心として、担任と連携を図り、進路指導が行われている。 ○進路決定満足度調査はまだ実施していない。 ○共通テスト前までで国公立決定者7名。	○学年団としての進路の取り組みをまとめ、次年度に引き継ぎ、充実した活動になるようにする。
	2年次	○生徒が主体的に社会と関わりを持ち、進路の選択肢を増やしていくことができる。	○大学教授・社会人などを結びつけ、進路探究する機会を設ける。 ○様々なコンテストや発表会において生徒が外部で発表できる場を増やす。	○校外の発表会・コンテストなどに20名以上の参加。	B	○現在コヒトカンコンテストに11名、ユネスコスクールに8名の参加がある。コヒトカンコンテストでは50を超える団体の中、上位5チームにはいる活躍を見せるチームもいた。	B	○校外の発表会、コンテスト等に参加した生徒はボランティアも含めると50名を超えている。	○参加した生徒は体験だけでなく、言語化して進路等に活かしていきたい。不参加の生徒にはいっそうの呼びかけが必要。

重点目標	関係分掌	課題	方策(具体的取組)	評価基準(評価可能数値)	中間評価	中期進捗状況	評価	年度未達成状況	新年度への課題
	1年次	○生徒の社会的な関心を高めることで、進路の選択肢を増やし、生徒が主体的な進路選択ができるような土台をつくる。	○大学だけでなく、生徒と様々な社会人を結びつける取り組みを実施する。 ○様々なコンテストや発表会を研究し、生徒が外部で発表できる場を増やす。 ○授業でプレゼンテーションや論理的な思考を文章で表現できる取り組みを充実させる。	○校外の発表会・コンテストなどに20名以上の参加。	B	○コノヒトカンコンテストに5名、ユネスコスクールに10名が参加し、外部での発表を行っている。 ○生徒全体の社会的視野を広げるような活動はまだ実施できていない。	B	○学年集会や各クラスで外部コンテストなどへの継続的な呼びかけや紹介を行った。 ○おかやまエコノmclubに3名など述べ20名を超える生徒が校外での活動に参加した。	○生徒の意識に差がある。進路活動と絡めながら、ボランティアを含め全員が年間1回以上の外部活動に参加するような環境づくりが必要。
5 「開かれた学校」の観点から、小中学校・地域との連携や姉妹校との国際交流などを通じて生徒の豊かな人間性を育成する。	教務課	○「開かれた学校」の観点から、小中学校・地域との連携を図る。	○教員だけでなく、生徒を中心として学習支援ボランティアやICT活用指導など小中学校とのつながりを作ることのできる広報活動を行う。 ○みまチャンネル、美作市広報との協力・連携。 ○塾および中学校教員を対象とした学校説明会を開催する。学校側の説明だけでなく高校生や保護者が本校の魅力を発信する。 ○オープンスクールの内容、広報の内容や時期を検討し計画的な広報活動を行う。 ○ホームページに最新の情報を掲載する。	○林野高校で学びたいという小中学生が増え、定員を充足することができる。	A	○サマースクールや学習支援ボランティアの開催で好印象をもってもらった。あがりん祭に小学生を招待できたよかった。 ○夏ボラで中学生の課題の手伝いや保育園への訪問など地域で活動できた。 ○オープンスクールサポーターとして生徒自身がレクレーションを考えたり、学校紹介のスライドを作成したりして生徒が主体となって会を運営できた。 ○オープンスクールのアンケート結果は中学生、保護者とも満足度が高い。高校選択の決め手がオープンスクールや学校説明会なので生徒募集に向けて順調に進んでいると考えられる。	A	○ボランティアに加え、みまさか学など、地域の方との交流により、地域からは温かい目で見られている。本校に関心を持ってくれた生徒や保護者の印象はよいように感じられる。 ○みまチャンネルと連携して行事を取材してもらったり、掲示板に行事予定や行事の内容を掲載してもらうことで地域に情報を発信できている。 ○第2回オープンスクールの参加者が少ないのが気になる。	○第2回オープンスクールの開催時期を検討すべき。
	生徒課	○生徒が小中学校・地域と関わり活動できる場を作る。	○各委員会、生徒会執行部が外部団体と連携をとり活動する。 例) 標語、ボランティア、コラボレーション	○各委員会、生徒会執行部単位で外部団体との活動を1回以上行うことができた団体が、8団体を超過(評価A)6団体を超過(評価B)5団体以下である(評価C) ※全12団体	B	○中央委員は「広報みまさか」への記事提供を毎月実施した。保健委員はあがりん祭文化の部において「美作市保健所との共同企画」を実施した。今後は風紀委員による「岡山県鍵閉めコンテスト」を実施する予定である。	B	○今年度実施した活動は以下のとおりである。 中央委員 広報みまさか寄稿、広報用インタビュー企画 保健委員 薬物乱用防止運動、文化祭での保健所展示 図書委員 美作地区図書委員会交流会、ブックハンティング 風紀委員 鍵締めコンテスト、交通標語とりまとめ 生徒会執行部 生徒会サミット 計5団体であった。	○来年度は文化委員で広報ポスターを展開、体育委員で体育祭での環太平洋大学との連携、美化委員で校外清掃活動の企画運営を計画している。 校外に連れ出すだけでなく、生徒から発案できるような体制を整えていきたい。
	グローバル人材PT	○姉妹校である台湾の2校とのオンライン交流や、中国語講座の継続実施。	○5～6月に参加希望生徒を募り、生徒の希望を尊重してオンライン交流、中国語講座に生徒を振り分け、9月から順次実施する。	○姉妹校とのオンライン交流はそれぞれ年8回程度実施(評価A)3～6回(評価B)2回以下(評価C)、中国語講座は10回程度実施(評価A)4～8回(評価B)3回以下(評価C)	B	○姉妹校交流は4月～6月で、2校で計7回実施。 中国語講座は9月より11回実施予定。	A	○中国語講座は11回実施。 ○姉妹校とのオンライン交流は1校は8回実施したが、1校は相手校の都合により、後半実施せず。前半で4回実施。	○来年、台湾の姉妹校との交流は直接交流とオンライン交流の2本立てになるので、相互に関連付けて行いたい。
	未来の学びプロジェクトPT	○地域課題を主体的に考える生徒を育成する。 ○本校の教育活動の魅力が地域に十分に伝わっていない。	○生徒の主体的な学習活動の基盤となる学力の向上を図るために、地域小中学校の教員と教科等での連携を図る。 ○みまちゃんネル、SNSのメディアの活用を通して本校の魅力を中学生やその保護者に発信する。	○令和6年度入試で志願者数が定員を充足する。 ○SNSでの情報発信件数が100件以上。	B	○ブログ、SNS(フェイスブック、インスタグラム)での情報発信数が50件。	B	○スポーツI 選択者による出前授業、学習支援ボランティア、サマースクールをはじめ、小中学校や地域と様々な連携活動が行えた。 ○地域連携コーディネーターに、探究活動のコーディネートや魅力発信のサポートを依頼することで充実した取組ができた。	○本プロジェクトは今年度で終了するが、小中学校との連携は一層重要になると思われる。特に、探究活動での連携を深めていく必要がある。
6 組織的で効率的な学校経営や個人の意識改革を進め、業務の負担軽減を図る。	運営委員会	○週1回の限られた時間内で、情報共有や次回職員会議の協議課題検討を行うための効率化。	○毎週実施される連絡会により、短いサイクルで密な検討を行い、学校運営において早い対応を行う。	○毎週1回(月4回)の実施。	B	○検討が時間内で終わらないことがある。レジュメの様式を変え、年度末に向け、検討の能率を上げていきたい。	B	○レジュメの様式を変更することで検討の能率が上がり時間内で会議が終了されるようになった。	○次年度も検討の能率を上げることで検討内容が深まるようにしたい。
	教務課	○各担当業務の必要性・効率・成果の検討。	○業務内容の精選。 ○必要な資料の検索時間が短縮されるよう、校務フォルダを整理する。 ○ホウレンソウの道筋を明確にし、組織的に課題や業務にあたる。	○分掌の業務を精査し、外部発注も含めて業務の無理や無駄を減少させる。	B	○定期的に課会が開かれているので進捗状況や業務改善にむけて話がしやすくなっている。 ○校務フォルダの整理を行っている。使い方のルールを徹底していく必要がある。(パブリックフォルダ) ○始業式、終業式、オープンスクールなど先生方と連携・協力しながら行っている。 ○要項の変更が全員に徹底されていない。今後の課題である。	B	○次年度に向けてさらなる効率化を目指し提案し、具体化に向けて計画されている。	○新しいアイデアをどのように具体化していくのかしっかり考えていくこと。
	生徒課	○効率のかつ一体感のある分掌業務化を目指す。	○クラウド上で資料を管理する。 ○紙媒体で行っていた調査、回覧、諸届をICTを活用し機能させる。 ○生徒課だよりによって他分掌教員へ生徒課業務への理解を促す。	○校務フォルダの5割の資料がドライブへ移行できる。 ○昨年度まで紙媒体で行っていたものを、5つ以上ICT化することができる。 ○生徒課だよりを月2回以上発行できる。 以上3点のうち3つが達成できている(評価A)2つが達成できている(評価B)1つだけ達成できている(評価C)	B	○会議資料をクラウド上で作成保存することが徹底できている。 ○派遣伺のフォーム化、学校生活アンケートのフォーム化、その他classroomを用いた委員会・生徒会への指示を徹底している。 ○生徒課だよりはvol.4を最後に中断している。	B	○校務フォルダの資料はほとんどの資料がPDF化し移行できているが、元データのままで移行があまり進んでいない。 ○ICT化(ペーパーレス化も含む)は①派遣伺い②入部届③ボランティア管理④保健だより⑤学校生活アンケート⑥委員会Classroomの運用⑦交通安全教室アンケートなど、今年度新たに実施できた。 ○生徒課だよりは5紙発行した。	○来年度は県提出用ファイル以外の移行を完成させたい。 ○派遣伺をICT化した結果、申請は容易になったが教員の目に触れなくなったため、グーグルカレンダーに自動転載されるようバージョンアップしたい。
	進路指導課	○「生徒のために」を合言葉に積極的に新しい挑戦をしていく。その中で、記録をきちんと残し、次年度に引き継ぐ。	○Google Workspaceを活用し、様々な情報を共有、周知できる仕組みを構築する。 ○わかりやすく引き継ぎ資料を残す。	○教員アンケートで満足度80%以上	B	○進路ニュースの趣旨変更、面接評価シートのスプレッドシート化など、大小様々なところで新しい挑戦をしている。また、都度記録を残すようにしている。	A	○学校自己評価アンケート(教員)「学校は、情報提供や生徒面談など進路指導をきめ細かく丁寧に行っている」肯定率94.3%、「学校は、教職員が勤務しやすい体制を整えている」肯定率57.1%。	○進路関係行事の精選と新しい挑戦。 ○Cloud by Default をさらに進め、業務の効率化を図る。
3年次	○ICT機器の利活用により年次団内の業務効率化を目指す。	○効率化に有効な手段・手法の共有や、情報の整理・蓄積により業務の時間短縮・負担軽減を図る。	○年次回会は必要に応じて無理なく開催している。	B	○朝礼シートや進路指導室内での連絡・掲示によって情報共有が図れている。	B	○朝礼シートを効果的に活用し、情報共有をこまめに図っている。また、年次回会は必要に応じて、無理なく開催した。	○朝礼シートを効果的に活用する。	
2年次	○効果的な情報共有ができ、業務の効率化をはかる。	○朝礼時間やホワイトボードを有効活用し、教員間で細やかな情報共有を行う。	○放課後会議を行う必要がないように、効果的な情報共有ができていく。	B	○朝礼や学年ホワイトボードを活用し、情報共有を行っている。	B	○朝礼での伝達やホワイトボードに加え、回覧形式を用いて情報共有を行うことができた。	○より効果的な伝達方法を模索していく。	
1年次	○学年団で業務を分担する体制をつくる。 ○ICT機器を活用し業務の効率化をはかる。	○教員間で細やかな情報共有を行い、年次回回覧・連絡ボード・Googleチャットなどにより情報を共有する。	○放課後会議を行う必要がないように、効果的な情報共有ができていく。	B	○朝礼やGoogleチャットの活用や必要に応じて短時打ち合わせを行うなど、学年団での情報共有ができていく。	B	○Google Workspace を活用しながら、適宜必要な情報共有ができた。	○効率化やスリム化に向けて個々のアイデアによる更なる改善が必要。	
ICT活用PT	○クラウドと行政系サーバが併用されているため、クラウドをさらに活用し、共同編集による資料作成や自動化などを推進する。また、引継ぎがうまくできるようにする。	○Cloud by default を促進する。 ○共有ドライブを整理する。 ○マニュアルを残す。 ○紙の資料を減らす。	○教員アンケートで満足度、達成率80%以上	B	○部活動関係書類(生徒課)、学校日誌(教務課)、面談評価シート(進路指導課)などをクラウドに移行した。 ○引き続き各分掌・学年等で、Cloud by default を促していく。(PDF化≠ペーパーレス) ○マニュアルを残しながら作業している。	A	○学校自己評価アンケート(教員)「学校は、生徒の資質・能力の向上のために、Chromebook を活用した先進的な取り組みを行っている」肯定率94.3%	○引き続き各分掌・学年等で、Cloud by default を促していく。 ○共同編集やChatを活用して、会議や議論が活性化するように促す。	

* 評価は… A:達成 B:ほぼ達成 C:達成がまだ不十分